

ハッジ 人生一大の旅 (2/2) : アブラハムの 礼

:

明:

人の5分の1が皆、共通の望を抱いていることがあります。それは人生で最低でも一度、ハッジと呼ばれる精神的な旅を行なうことです。第二部: アラファから最の礼までの行程を て行きます。また、全能者によって められるハッジとは一体どのようなものでしょうか。

目: [「事崇行とその実践の五ヶ条」とその他の崇行](#)

より: ニィ

日 28 Jun 2010

集日 28 Jun 2010

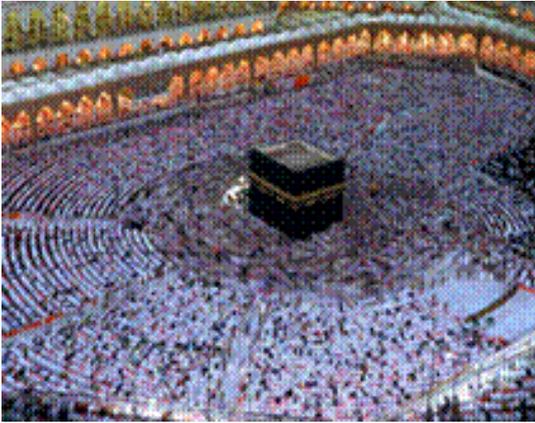


日没の直、巡礼者の群はアラファからミナまでの中地点に位置する平野、ムズダリファへと出します。そこで彼らはまず礼し、翌日に使用されるヒヨコ豆程度の大きさの小石を一定数集めます。

巡礼者たちは三日目の夜明け前には、ムズダリファからミナへと集移します。そこで彼らは事前に集めておいた小石を白い柱に向かって放ります。この礼は言者アブラハムにまつわるものです。巡礼者たちはこれらの柱へと小石を七ずつ投げることにより、魔のきを振り切って神の命令に、息子を犠に捧げようとしたアブラハムの物を思い起こすのです。

この投石は、人によるの 拭を象 します。それは1度だけでなく永久性を象 する数である7度に渡ります。

投石、大半の巡礼者たちはヤギ、羊、またはその他の物を屠ります。それらの肉は しい人々に分け与えられ、一部は自分たちのものとなります。



この 礼は、神の意志に い自分の息子を 牲に捧げようとした、アブラハムの献身に基づいています。それはムスリムが自らにとってかけがえのないものを失うことをも わない 意を象 し、神の意志への服 が最も重要であるイスラ ムの精神を想起させるのです。この行 は巡礼者たちが まれない人々へと世俗的な を配分すること、そして神への感 の持ちも思い起こさせます。

この段 になると、巡礼者たちはハッジにおける主要な部分を 了するため、イフラ ムを脱いで通常の衣服を着用することが出来るようになります。この日、世界中のムスリムたちは巡礼者たちと同 に 牲を捧げ、“イ ドル=アドハ ”（ 牲祭）という祭日において喜びを分かち合います。清 な状 から脱する印として男性は剃 、または断 し、女性は束ねた の一端にハサミを入れます。これは の象 として行なわれます。夫 の肉体 以外の禁止事 は、この 点で解かれます。

依然としてミナ に留まる巡礼者たちは、次にマッカへと向かい、???

における次の重要な 礼を行ないます：それは祈 しつつカアバの周りを七度に渡って周回する、????

と呼ばれるものです。神の唯一性を表象化するカアバの周回により、全ての人 による

活は神を中心とされるべきことが示唆されているのです。また、それは神と人の束も象します。

イスラムへの改宗者であり、作家、そしてナショナル ジオグラフィック の写真家でもあるトマス アバ クロンビ は、1970年代に

を行ない、周回の に巡礼者たちが感じる 一感と 和をこのように表しています：

“我々はアラビア の祈 を 返しつつ、 殿を七周した： ‘主なる神よ、私は 隔の地からあなたのもとへ せ参じました あなたの玉座の下に私への庇 をお与え下さい。’ 叙情的な祈 に高 されつつ く群 の中で、我々は原子の法 に って神の の 道に り、 星と 和したのだ。”

周回の 、巡礼者たちは 石にキスするか、または触れることが出来ます。この 形の石は七世 の わり、 の に初めて埋め まれましたが、一部のハディ スによれば、アブラハムとイシマエルによって建 された建物元来の唯一の残存物とされるため、ムスリムたちにとって特 な位置を占めています。しかしこの石にキスをする最大の理由は、 言者がそのようにしたからでしょう。

しかしながらその石に しては、これまで一度もそうではなかったよう、崇 の 象では してないため、信仰における重要性は全く 属させられません。第二代カリフのウマル ブン アル=ハッタ ブは、 言者を模 し、自身でその石をキスした 、このように宣言したことによってこの件を明 にしています：

“?? - ?????????? -
??”

????

の 了 、巡礼者たちはアブラハムがカアバ建 に立った 所であるとされる ‘アブラハムの立ち ’ 方にて礼 を捧げ、ザムザムの水を みます。

もう一つの、そして 合によっては最 のそれともなり得る 礼は、“努力する”という意味を持つ???

です。これはクルアーンにおいて、“不毛の谷”と呼ばれる所に行かれて行かれたハガルが、その乳イシマエルのために行なった、忘れい逸の再です。

???

では、イシマエルの水をそうと水を求めるハガルの必死の探索が念されます。彼女はアッ=サファとアル=マルワの2つの丘のを7回に渡ってけ巡り、最終的にザムザムとして知られる水の泉をしました。この水はイシマエルの小さな足元から奇的にき出た泉であり、在でも巡礼者たちは同じ所から々とき出るこの水をむのです。

これらの礼が遂行されると、巡礼者たちは清な状を完全に脱し、通常の活にすることが出来ます。彼らはミナヘリ、ズル=ヒッジャ月の12日目、もしくは13日目までそこに留まります。そこで彼らは言者によって可された通りの方法で、残りの小石をそれぞれの柱へと放ります。その彼らは??

期中に出来た友人たちとれることとなります。マッカを去る前には地へのれとして、巡礼者たちはカアバ周りで最の???を行ないます。

巡礼者たちは一般的に、“大巡礼”とされる???の前に、“小巡礼”とされる??を行ないます。それはクルアーンにおいて可されており、言者も行なっているものです。???とはなり、??

はマッカの中でのみ行なわれ、また年を通して行うことが出来ます。????、????

、そして清な状において制される事柄はでも重要であり、そこでは???と同の???、??

、そして剃（または断）の三つの礼が行なわれます。巡礼者や者たちによって遵守される????は、マッカ独自である域への敬意が象されるのです。

同にマッカの前には?か???

によって提供される会として、巡礼者たちはイスラム第二の地である、マディナの言者モスクをれます。ここには言者の埋葬されているシンプルな墓が存在します。マディナへの?はや???

の礼の一部ではないためではありませんが、この町はムハンマドによるマッカからの移住を迎えた、言者そして指者としての彼を起させる感的な出来事や史的所が数々存

在します。

以来ムスリムたちによってこよなく されるこの町で、人々は依然として 言者の人生による影 を感じ取ることが出来るのです。ユダヤ系オ ストリア人だったムハンマド アサドは1926年にイスラ ムへ改宗し、1927年から1932年にかけて5度の巡礼を行ないました。彼はこの町に してこう 言しています：

“13世 った今でも、（言者の）精神的存在感は当 と同じように生きている。彼によって散在した村落だったヤスリブは一つの都市となり、今日に至るまで未だかつて世界中のいかなる都市も されたことがなかった程、あらゆるムスリムによって され けて来たのである。その都市には自らの名前が未だになく、13世 以上に渡って、????????????

、つまり ‘言者の町’ と呼ばれて来たのである。1,300年以上の 、非常に多くの情が寄せられて来たため、全ての形や きは家庭的な を せ、あらゆる外 の いは共通の音色へと 和したのである。”

多 多 なる人、そして言 を す巡礼者たちが 省する には、アブラハム、イシマエル、ハガル、そしてムハンマドにまつわる大切な 念物を持ち ります。それは富裕者、 者、 人、白人、若者、老人が一 に共通の足 に集った、普遍的合同による であり、彼らはそれを常に思い起こすでしょう。

彼らは畏敬や平静の念を携えて 途に就きます。アラファの地において、言者が最初と最 の巡礼で 教をした同じ 所で、神を近くに感じたことによる畏敬の念、そしてその平野で 罪をし、重荷から解放されたことから来る平静の念です。彼らにはまた、イスラ ムにおける兄弟がどのような状 にあるのかに し、以前よりも良い理解があるでしょう。それゆえ他者に する思いやりの 持ちと、イスラ ムという自分たちの かな に する理解といった新たな精神が 生するのである。

巡礼者たちは希望と喜びに ちて 省します。彼らは神によって された、人 に しての古代から 巡礼の という 令を果たしたからです。何より、彼らの口には祈 の言 がその 途においてつぶやかれていることでしょう。それが自分たちのハッジを められたものであ

